

国立国語研究所学術情報リポジトリ

現実会話と小説内会話における「ッテ」文末引用文の使用傾向

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2022-01-21 キーワード (Ja): キーワード (En): register, quotations, real-life conversations, conversations in novels, author's intention 作成者: 清水, まさ子, SHIMIZU, Masako メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00003512

現実会話と小説内会話における「ッテ」文末引用文の使用傾向

清水まさ子

国際交流基金日本語国際センター／国立国語研究所 共同研究員

要旨

本稿では、「ッテ」文末引用文を例に、現実会話と小説内会話といった異なるレジスターの会話であれば、引用文の使用傾向にも違いが出てくるのかについて考察した。

調査の結果、「ッテ」文末引用文は両会話ともに使用が最も多かったが、使われ方は異なっていた。また「ダッテ」文末引用文に関しては、小説内会話では「ダッテ」の文末に「？」のついた「ダッテ？」文末引用文が多かったが、現実会話では「？」にあたる上昇調の「ダッテ」はほとんどなく、多くが下降調のイントネーションであった。これらの調査結果からレジスターが異なれば引用文の使用傾向が異なることが明らかになった。

なぜこのような結果になったのか考察したところ、両会話の特性が「ッテ」文末引用文の出現傾向に影響していることが考えられた。つまり、作者の意図の影響がなく、話者同士の相互作用で成り立っているという現実会話の特性と、作者の意図が存在し、登場人物だけではなく読者の存在も意識しなければいけない小説内会話の特性である。これらそれぞれの会話の特性が「ッテ」文末引用文に影響を与えているため、レジスターが異なる会話では、「ッテ」文末引用文の使用傾向が異なるのではないかと考えた*。

キーワード：レジスター、引用文、現実会話、小説内会話、作者の意図

1. はじめに

現在までに、引用文に関する定義や用法は数多く研究されてきている。しかし、これらの研究では、引用文がどのような領域で使われるのか、つまりレジスターまで考慮されることは少なかった。話し言葉でよく使われる引用標識「ッテ」を伴う引用文も、「話し言葉」であったら、レジスターに関係なく、同じように使われているのであろうか。

高崎（1981）と小西（2011）は、小説内の会話と現実の会話で使われる文法項目を比較し、その使用傾向に異なりがあると述べている。これらの先行研究の結果が引用文の使用傾向にも当てはまるのであれば、レジスターの違いは、引用文の使用傾向にも影響を及ぼしている可能性がある。

本稿は、現実世界で話されている会話（以下、現実会話と呼ぶ）と小説の中で話されている会話（以下、小説内会話）における引用文の使用傾向の違いを、「ッテ」文末の引用文を例に調査し、同じ「会話」でもレジスターが異なれば引用文の使用傾向も異なるのか調査する。

* 本稿は、シンポジウム「日常会話コーパスIV」でのポスター発表「日常会話と疑似会話における「って」の使用比較—引用・伝聞用法を中心に—」の内容を基に、大幅に加筆及び修正を加えたものである。また、本研究は国立国語研究所の共同研究プロジェクト「大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究」（プロジェクトリーダー：小磯花絵）の研究成果である。本稿の作成において、査読者の先生方から有益なご助言をいただきました。また英文要旨に関しては、松本曜先生からご助言いただきました。この場を借りて、厚く御礼申し上げます。

2. 先行研究

先行研究では、まず本稿で扱う引用関連の用語の定義を行い、調査対象とする「ッテ」文末引用文の用法について整理する。それから本調査のきっかけとなった現実会話と小説内会話における文法の使用傾向を比較した先行研究について触れ、なぜこのような差が出るのか説明する。そして最後にレジスターの異なる会話における文法項目を比較しようとする本研究に、どのような意義があるのか述べる。

2.1 本稿で扱う引用表現

2.1.1 引用文の定義

藤田（2000）は引用について以下のように定義した。

所与と見なされるコトバを再現しようとする形で示すもので、そのコトバのまとまりが、そのようなものとして、文の構成要素として機能しているもの（藤田 2000: 9）

藤田（2000）では引用される言葉は、実際に発言されたかどうかは問題にしないため、「所与と見なされるコトバ」という表現を用いている。また、「所与と見なされるコトバを再現する形で」ではなく、「再現しようとする形で」としたのは、引用は元の言葉を再現するにも、その再現レベルがあるため、元の言葉を再現しようとする姿勢、それを表そうとしたからである。また、「そのようなものとして」とは、引用されたコトバとして一つまり、所与のコトバの再現という表現性をもって、更にいうなら、所与のコトバを再現したものであることによる何らかの意味をもって、用いられているという意である」（pp.12-13）としている。

つまり、藤田（2000）でいう引用とは、実際に発言されたかどうかということは問題にせず、話者によって外に「ある」とされるコトバを話者が再現しようとし、その際に、引用だと相手にわかる形で表現され、それが文の構成要素として機能しているものであるとされている。本稿でも、引用の定義はこの藤田（2000）の定義を参考に、「話者によって外にあると見なされるコトバ——先行文脈で述べられたかは問題にはしない——を話者自身の談話中で再現しようとする。その際に引用だと相手にわかる形で表現されるもの」を引用とし、この引用の定義を満たした文を引用文とし、その際に用いられる表現を引用表現、引用を示す「ト」や「ッテ」を引用標識と呼ぶ。

2.1.2 文末の引用標識「ッテ」に関する研究

話し言葉において、引用する際には引用標識「ッテ」や「ト」を用いるが、本稿では議論や討論といったフォーマルな場で多く用いられる「ト」ではなく、日常的に広範囲で使用される引用標識「ッテ」を中心に見ていく。この引用標識「ッテ」に関する清水（2020）の調査では、小説内会話と現実会話における「ッテ」を含んだ引用文のうち、最も多かったのは「ッテ+いう」の形であり、次に多かったのは次のような「ッテ」文末の引用文であった。

(1) いくつなんだろって。(T015_006 [CEJC] 621.589-622.441) ¹

清水 (2020) では「ッテ+いう」の形の引用文について考察したが、次に多い「ッテ」文末の引用文については考察されていない。

加藤 (2010) では、本稿で対象となる「ッテ」文末引用文について、次のように 15 の用法に分類し²、それらの機能の共通性から、さらに大きく 5 分類にわけた。

- (A) (話し言葉において形態の若干の変化を伴うが) 引用の基本型を表示する機能を果たすもの
休止系・後接部省略形・引用部並列系
- (B) 先行文脈の関連情報を談話内で追加するもの
帰結確認用法・精緻化情報確認用法・帰結述べ立て用法
- (C) 話者の情報伝達・受容に当たっての心的態度を表すもの
帰結述べ立て用法・言明用法・理解困難表示用法・意外感表示用法
- (D) 情報の種類を明示しつつ情報の伝達に関わるもの
伝言取次ぎ用法・伝聞情報表示用法
- (E) 発話意識の表明により発話境界を表示するもの
自己演出用法・発話の力軽減用法・自己確認納得用法・認知境界表示用法

(加藤 2010, pp.65-66)

加藤 (2010) の研究は、「ッテ」や「ト」といった引用標識に注目し、話し言葉におけるこれらの用法を整理しまとめた研究として、引用研究に与えた功績は非常に大きい。しかし加藤 (2010) で使用されたデータは、「ジャンルが多岐に渡る話し言葉」(p.15) であり、討論番組から友人同士の雑談まで多様である。多様であるがゆえに、調査対象とする引用文が「どのような会話で」用いられているのかまでは考慮されていない。

近年、話し言葉に関するコーパスが整備され、ただ「話し言葉」といっても、レジスターが限定され、かつ量的な研究も行える環境が整備されてきた。それゆえ、話し言葉における引用文についての研究でも、もう一步踏み込んだ、レジスターも考慮した研究ができると考えられる。

2.2 現実会話と小説内会話における文法の使用傾向の違い

現実会話と小説内会話とにおける文法の使用傾向を見ると、両者は異なるという結果が出ている (高崎 1981, 大石 1987, 小西 2011)。

高崎 (1981) は、ある一編の小説内会話と実際の話し言葉を対象に、その中に出てくる指示語や接続詞、助詞や終助詞などの使用傾向を調べた。その結果、両方で使われている文法項目の使用傾向は異なり、また量的な面だけではなく、質的な面でも異なる点が見られた。

大石 (1987) は、「近代・現代の小説の会話文が話しことば研究の資料としてどれほど使える

¹ 出典については本稿 4.1 で詳説する

² (A) ~ (E) の大分類の中で (B) と (C) では共通して「帰結述べ立て用法」が使われている。

のか」(p74) という観点から小説内会話と実際の話し言葉を主に文法面から比較し、小説内会話と話し言葉の間には使用傾向に差があることを述べている。

小西 (2011) は、伝聞の「ソウダ」の使用傾向の違いについて、「日本語話し言葉コーパス (CSJ)」と「現代日本語書き言葉均衡コーパス (BCCWJ)」を用いて、音声言語と文字言語という観点から違いがあるのかという調査を行った。その結果、BCCWJの中でも「文学」のジャンル、特に小説の会話文特有の表現として「「そうだ」+終助詞」(例：～そうね)と、「「そう」+終助詞」(例：～そうよ)が使用されていることが明らかになった。

大石 (1987) や高崎 (1981)、小西 (2011) らは共通して、小説内会話と現実会話における文法の使用傾向には差があると述べている。さらにこれらの先行研究は、「小説の会話を実際の話し言葉ではないと思ったほうがいい」という共通の考察にも至っている。

確かに現実会話と小説内会話を同一のものとして扱うことはしないほうがいだろうが、これらの先行研究は「小説内会話は現実会話にどのくらい似ているか」という観点からの考察であり、現実会話を中心に据えた考察である。両会話をそもそも異なる会話と考えるなら、小説内会話と現実会話の文法的振る舞いの違いを「なぜこのような使用傾向の差が出たのか」と考えることもできるだろう。

2.3 現実会話とフィクション会話との違い

それでは、現実会話と小説内会話は、そもそもどのような点で異なっているのでしょうか。ここでは小説内会話を、演劇や漫画のセリフといったフィクションの話し言葉の一つとして考え、現実の話し言葉とフィクションの話し言葉の違いを考察している先行研究を紹介する。

金水 (2014) は、現実の日常的な話し言葉とフィクションの話し言葉を場面依存性、逐次処理性など五つの観点から比較した。そして「フィクションの話し言葉は、自然な話し言葉に似ているところも違うところもあるが、似ているようでもそれは作り手の意図に奉仕する形で利用されているのであり、あくまで作品のために再構成された言語である」(p.11)と述べた。フィクションの話し言葉が「作り手の意図」によるものだという事は、高崎 (1981) でも述べられている。では、フィクションの話し言葉には作り手の意図が込められているとすると、それによって、どのような特徴が表れてくるのだろうか。

現実会話は、話者同士のみで行われる。一方、フィクション会話は、登場人物同士だけではなく、そのフィクションを読んでいる、または見ている読者や観客に対しても行われるという (山口 2007)。山口 (2007) は、このフィクションの世界で登場人物同士がやりとりする伝達のことを微視的伝達、作者から読者や観客に対して向けられた伝達を巨視的伝達と名付けた。山口 (2007) の言葉を用いるなら、現実会話は話者同士のみの微視的伝達であるのに対し、フィクション会話は微視的伝達に加え、巨視的伝達も含んでいると言える。

金水 (2014) は、山口 (2007) の巨視的伝達について触れ、巨視的伝達とは「作者から読者への説明が登場人物の発話を通して行われること」(p.6)だと述べた。つまり、作者の意図が巨視的伝達という方法によって読者に伝えられているわけである。

以上のように、フィクションの話し言葉には作者の意図があり、それによって巨視的伝達が起こる。そしてこの巨視的伝達こそ、現実会話とは異なる点である。フィクションの話し言葉の一つである小説内会話も、巨視的伝達という特徴を含んでいる点で現実会話と異なると考えられる。

2.4 本研究の意義

本稿では、現実会話と小説内会話といったレジスターの異なる会話における文法項目を比較するが、このような比較はどのような意義があるのであろうか。

本稿で調査対象とする小説というのは、日常生活の中で数あるメディアの中の一つである。三宅 (2011) は、メディアを「コミュニケーションにおける媒体」(p.21) という意味で使い、「これまで、教材として各種のメディアが利用されてきたが、メディアへの視線が十分であったかについては改めて問い直す必要があるだろう」(p.21) と述べ、日本語教育においてはメディアという点への注目があまりなされていなかったことを批判した。そしてメディアという視線を介在させたことばの研究の意義として、1) 教師と学習者のリテラシーの獲得、2) 教師と学習者の使用言語に関する深い理解、3) 教師の教材づくりのヒント、を挙げた。

三宅 (2011) の「メディアへの視線」を本調査でも考慮するならば、本稿で調査対象とする「小説」の特徴の一つとしては、石黒 (2007) のいう「間接性」(p.182) が挙げられる。「間接性」とは、例えば論文は、述べたいことだけを簡潔に述べるのが良しとされるが、小説は述べたいことを述べるために、いろいろな状況を描いたり、他の事柄を叙述したりしながら、述べたいことを述べる。このような小説というメディアの特性を考慮しながら、小説内会話を考察する必要があるだろう。

とはいえ、小説内会話を考察したからといって、2.2 の先行研究で述べたように、小説内会話は現実会話とは性質が異なるため、考察の結果を会話教材などにそのまま活かすことはできない。しかし金水 (2011) が述べるように、日本語母語話者の頭の中には普段実際には使わないが、役割語のように確かに知識として存在する言語変種がある。小説内会話を調査するということは、そのような母語話者が知識として持つ言語変種の一片を理解しようとすることである。また現実会話と小説内会話を比較することによって、それぞれの文法項目を調査するだけよりも、かえって両会話の特徴が明らかになる可能性がある。

3. 研究の目的

先行研究から、レジスターの異なる会話を比較しながら言葉を調査することで、両会話の特性が明確になり、日本語母語話者が知識として持つ言語変種の一片を明らかにできる可能性があることがわかった。また、現実会話と小説内会話におけるいくつかの文法項目に関しては、使用傾向の違いが調査され、両者は異なるという結果が出ていた。しかし引用に関する研究については、話し言葉における引用標識「ッテ」文末の引用文に関して、その用法を整理し記述した研究はあるが、それらは実際に話される話し言葉全般を対象としており、レジスターの観点から見た記述はされていない。先行研究で使用傾向に差が出た他の文法項目と同じく、同じ「会話」であって

も、現実会話と小説内会話とでは引用文の使用傾向が異なるのであろうか。

この点を考える上で重要になってくる点は、先行研究から、現実会話にはなくフィクションの会話にはある「作者の意図」や「巨視的視点」といった考え方である。両会話の文法の使用傾向を比較し考察する際には、この点を考える必要がある。

以上を踏まえて、本研究の目的を以下のように設定する。

研究目的：現実会話と小説内会話における「ッテ」文末引用文の使用傾向を比較し、巨視的伝達や微視的伝達といった作者の意図の有無が使用傾向の違いに影響しているのかを考察する。さらにそこから、両会話の特性を考察し、日本語母語話者が知識として持つ言語変種の一片を明らかにする。

4. 調査概要

4.1 調査対象コーパス

本稿で調査対象としたのは国立国語研究所が作成した『日本語日常会話コーパス』（以 CEJC と呼ぶ）（小磯他 2017）のモニター公開版と『現代日本語書き言葉均衡コーパス』（以下 BCCWJ と呼ぶ）である。現実会話は CEJC を、小説内会話は BCCWJ 内の図書館サブコーパス中の小説会話部分（1990 年代、2000 年代）を対象とした。

CEJC モニター公開版を選んだのは、日常における多様な場面・関係の話者の日常会話がバランスよく 50 時間分収録されているためである。また小説内会話を調査するために BCCWJ 内の図書館サブコーパス中の小説を選んだのは、小説会話文に対して話者情報アノテーションデータが付与されているためである（山崎他 2019）。小説中の会話の認定は難しい。「」は会話を示す記号と一般的に思われているが、宮寄他（2016）でも述べられているように、作者によってはただ看板の名前を示すために使っているケースや、会話であるのに「」を使っていないケースも見受けられる。つまり「」の使い方一つとっても、作者個々によって使い方が異なっているのである。そのため、小説内の会話を認定する客観的な指標として、話者情報アノテーションデータを用いて、この話者情報が付与されている部分を会話として認定した。使用した話者情報アノテーションデータは 2019 年 3 月時点のものである。

4.2 調査対象項目

本稿では、引用標識「ッテ」が文末に来る引用文を調査対象とした。清水（2020）では、現実会話と小説内会話における引用標識「ッテ」の後にどのような品詞が来るのか調査したところ、最も多かったのは動詞が後続する場合であり、そして次は「ッテ」文末の引用文であった。本稿では、清水（2020）で調査されていなかった「ッテ」文末の引用文を調査対象とする。

「ッテ」には「ダッテ」や「ンダッテ」という形もあるが、加藤（2010）はこれら「ダッテ」「ンダッテ」も独立した形として扱ったほうが、「(省略)「ッテ」という形態を共有するこれらの三つが持つ様々な用法の関係が明確に見渡せ、簡潔な記述ができる」(p.143) とした。本稿も加藤

(2010)と同じく、「ッテ／ダッテ／ンダッテ」それぞれが独立していると考え、これら三つの形を調査対象とした³。

4.3 調査手順

本研究では現実会話と小説内会話における「ッテ」文末引用文の使用傾向を調査するために、以下の調査をした。

①両会話における「ッテ／ダッテ／ンダッテ」の量的な調査

②両会話における「ッテ／ダッテ／ンダッテ」の語調調査

①において、まず両会話において「ッテ／ダッテ／ンダッテ」がそれぞれどのぐらい用いられているのかについて調査した。調査の方法としては、現実会話及び小説内会話ともに、オンライン検索システム「中納言」を使用し、CEJC及びBCCWJ内の、「助詞 - 副助詞のッテ」を検索した。今回は文末における引用標識「ッテ」を調査対象とするので、CEJCでは発話の区切りとされる「#」マークが前に来ているもの、つまり「(発話) って#」を抽出した。小説内会話に関しては、BCCWJの図書館サブコーパスの小説で、1990年代、2000年代のものを特定して検索し、文末を表す「。」や「?」「!」といった記号が後に続くもの、つまり例えば「(文) って。」という形の文を抽出した。抽出後、調査対象の「ッテ」が小説内会話中に出現しているのか確認するために、4.1で述べた小説会話文に対する話者情報アノテーションデータ内の会話と照合した。

②に関しては、使用傾向の調査の一環として、どのような調子で相手に対して話しているのかについても調べた。現実会話ではCEJCの会話音声ならびに転記テキストデータを用いて上昇調か下降調のどちらであるかを確認した。また小説内会話の語調調査には、文末に付されている「?」や「!」「…」といった記号を確認した。

5. 調査

5.1 「ッテ／ダッテ／ンダッテ」の量的調査

まず、それぞれの会話における「ッテ／ダッテ／ンダッテ」の出現傾向について調査した。

その結果が、表1である。表内の数字は出現頻度であり、()内の数字は会話における「ッテ／ダッテ／ンダッテ／その他」合計頻度に対する割合である⁴。

³「ダッテ」には、より丁寧な表現である「デスッテ」も含んだ。

⁴表内の「その他」には、「文+って。」のように文の後にすぐに「ッテ」が接続するのではなく、「文」と「ッテ」の間に少しの間があったり、他の人の話の後に、以下のように「ッテ。」のみで答えていたり、他の多くの「ッテ」文末の用例と同じく考えていいのか判断に迷うものを入れた。

- (i) 奈津子：これ何 スイートルーム載せてんのかな。
 奈津子：これを見て見ちゃうと。
 萌：ね。
 萌：あ。
 萌：ああ。
 奈津子：って。 (K001_014 [CEJC] 3022.686-3027.546)

表1 「ッテ／ダッテ／ンダッテ」文末の頻度

	ッテ	ダッテ	ンダッテ	その他	計
現実会話	516 (60.2)	108 (12.6)	223 (26.0)	10 (1.2)	857 (100)
小説内会話	838 (53.0)	470 (29.7)	271 (17.2)	1 (0.1)	1580 (100)

どちらの会話においても「ッテ」文末が過半数以上であり、現実会話では60.2%、小説内会話では53.0%であった。続いて現実会話では「ンダッテ」が26.0%、「ダッテ」が12.6%であったのに対し、小説内会話では「ダッテ」が29.7%、「ンダッテ」が17.2%と続いた。つまり現実会話では「ッテ」>「ンダッテ」>「ダッテ」だったのに対し、小説内会話では「ッテ」>「ダッテ」>「ンダッテ」の順となり、出現傾向に違いがでた。

5.2 「ッテ／ダッテ／ンダッテ」の語調調査

5.2.1 現実会話における語調調査

次に、それぞれの会話における「ッテ／ダッテ／ンダッテ」の語調を調べた。次の表2は現実会話において「ッテ／ダッテ／ンダッテ」が上昇調か下降調かについて表した表である。

表2 現実会話における語調調査

	上昇調	下降調
ッテ	20	496
ダッテ	4	104
ンダッテ	4	219
それ以外	0	10
合計	28	829

表2を見ると、上昇調は計28例で「ッテ／ダッテ／ンダッテ」全体の3.3%、下降調は829例で全体の96.7%であり、下降調がほとんどであることがわかった。

5.2.2 小説内会話における語調調査

まず、現実会話において上昇調にあたる「？」や、その他「!」「…」といった文末記号、そして現実会話の下降調にあたる「句点のみ」の用例が、小説内会話ではどのくらいあるのか調査した。その結果が表3である。

表3 小説内会話における語調調査

	?	その他文末記号	句点のみ	合計
ッテ	166 (19.8)	153 (18.3)	519 (61.9)	838 (100)
ダッテ	216 (46.0)	89 (18.9)	165 (35.1)	470 (100)
ンダッテ	37 (13.7)	19 (7.0)	215 (79.3)	271 (100)

表3を見てみると、「ッテ」と「ンダッテ」の用例の過半数は「句点のみ」であることがわかる。特に「ンダッテ」の場合、「句点のみ」の場合は80%近くあった。逆に「ダッテ」は「句点のみ」のほうが少ない、上昇調を表す「？」が付加されている用例が最も多いことがわかる。これは、次のような用例である。

- (2) 「十一月の一日が予定日と言われたのです」と、言った時、それまで黙っていた夫がいきなり大声を挙げたので、びっくりした。「なんだって？赤ん坊が生まれる？」
(LBf9_00152 [BCCWJ] 萩原葉子著『木馬館』)
- (3) 「ひと月五百ドルの送金がある」ヘレン・ライデッカーはクッキーの瓶に手を入れたところを見つけたような、どきっとした顔つきになった。「なんですって？」
(LBf9_0005 [BCCWJ] ジョナサン・ケラーマン『サイレント・パートナー』)
- (4) 「あなたが名乗った以上、こっちも名乗らなきゃ、不公平ね。私は、徳川秋子というのよ」
「徳川秋子だって？」 (LBe9_00162 [BCCWJ] 志茂田景樹著『怪盗十字架の挑戦』)
- (5) 「なぜあなたは、あの方に敵意を抱くのです？ そのため、わたしは困っているんですよ」
「わたしがあなたを困らせる、ですって？」
(LBg9_00159 [BCCWJ] ローベルト・ムージル著『ムージル著作集』)

(2) と (3) は、「なんだって？」「なんですって？」と「何」に「だ／です」が接続して、驚嘆を表している例である。

また、(4) は傍線部の前の文で話し相手が「私は、徳川秋子というのよ」と自己紹介したのに対して、その名を繰り返して驚嘆を表している例である。(5) では相手が「なぜあなたは、あの方に敵意を抱くのです？そのため、わたしは困っているんですよ」と話した言葉をそのまま繰り返すのではなく、自分の立場からの文に置き換えて、「わたしがあなたを困らせる」と繰り返している。このように、ただ前出した語／文を繰り返すのではなく、同じ内容だが異なる文言に置き換えて繰り返す例も見られた。

「ダッテ？」の用例 216 例のうち、「なんだって／なんですって？」は 96 件、「前出した語／文の繰り返し+ダッテ？」は 85 例であり、この 2 種の「ダッテ？」で「ダッテ？」全体の約 84% を占めた。

6. 考察

上記の調査において、以下のことがわかった。

- ①現実会話は「ッテ」>「ンダッテ」>「ダッテ」だったのに対し、小説内会話では「ッテ」>「ダッテ」>「ンダッテ」の順に多く使用されていた。
- ②現実会話では「ッテ／ダッテ／ンダッテ」いずれも上昇調はほとんどなく、ほとんど下降調であった。
- ③小説内会話では、文末に記号が付加されることが多いのはダッテ>ッテ>ンダッテの順であり、「ダッテ」には「？」が付加されている用例が最も多かった。
- ④小説内会話では「ダッテ？」のうち、「なんだって／なんですって？」と「前出した語／文の繰り返し+ダッテ？」で全体の約 84% を占めた。

これらの調査において、現実会話と小説内会話において共通している点としては、「ッテ／ダッ

テ／ンダッテ」の中では、「ッテ」の用例数が最も多いことである。

一方、語調調査では現実会話ではほとんど下降調であったのに対し、小説内会話では上昇調を表す記号である「？」が付加された、「ダッテ？」という用例が多かった。

以上の結果から以下の考察では、両会話において共通して多く出現していた「ッテ」の用法と、小説内会話における「ダッテ？」の用法に注目し考察していく。

6.1 現実会話と小説内会話で共通して多い「ッテ」文末の形式について

両会話において共通して多かったのは、「ッテ」文末の引用文であった。ここでは、両会話における「ッテ」文末の引用文がどのように用いられているのかを比較するために、比較する用例の条件をそろえることにし、現実会話では多数を占めた下降イントネーションを、小説内会話では文末が句点のみのものを考察対象とした。その結果、現実会話では496例、小説内会話では519例が該当した。

以下、それぞれの会話における「ッテ」文末引用文を詳しく見てみる。

6.1.1 現実会話における「ッテ」文末引用文の特徴

現実会話における「ッテ」文末引用文の特徴としては、前会話で出てきたフレーズをそのまま繰り返す、またはある程度繰り返す際に用いられているということである。

(6) 広瀬：やっぱり和食は偉大ですよ。

奥村：偉大って。(T001_014 [CEJC] 2576.145-2578.661)

(6)の例は広瀬が言っていた波線部「偉大」という部分を奥村が繰り返している。このような前会話部分の何らかの繰り返しは、496例中85例で全体の17.1%、小説内会話では519例中45例と8.7%であった。

前会話における文言をそのまま繰り返すほどではないが、同じ内容を異なる文言にして繰り返している用例が多いのも現実会話における「ッテ」文末引用文の特徴であった。以下に例を挙げる。

(7) 柚本：夜ご飯。

俊明：夜ご飯何？。

柚本：おうちでもい:い?

俊明：え？。

俊明：どう(Wユ|ゆう)こと？。

柚本：夜ご飯みんなで食べないでおうちで食べてもい:いって。

俊明：あーあー。

俊明：いいよ。

(T009_014a [CEJC] 194.782-202.441)

(8) 義母：お茶あるよ。

(途中省略)

義母：お茶飲む人。

翔真：撮るの早くない？。

佐竹：おばあちゃんがお茶くれるって。 (T011_014 [CEJC] 271.154-273.046)

(7) は柚本が俊明に対して波線部「おうちででもいい？」と聞き、その意味がわからなかった俊明が「どういうこと」かと問うと、柚本が傍線部のようにより詳しく答えている。また (8) は、親戚の集まりの一場面であるが、義母が回りに対して波線部のように「お茶あるよ」「お茶飲む人」とお茶を勧めているが、反応がないため、佐竹が傍線部のように「おばあちゃんがお茶くれるって」と、他の表現にしてお茶を勧めている。

以上の (6)～(8) は程度の差はあれ、前会話で述べられたことを繰り返している点で共通しているが、それだけではなく、話者相互の存在にも支えられている。

(6) の漫才のツッコミのような「偉大って」という用例は、加藤 (2010) でいう「意外感表示用法」である。この用法は加藤 (2010) では「心的態度を示す用法」であり、「…聞き手に対して働きかける性質を持つ、相互作用の存在に支えられたものである」(p.134) とされる。(7) は、柚本の「夜ご飯」というだけの情報が、俊明の問いかけによって徐々に情報が追加され、最後には俊明にも理解できる情報となり、話者相互のやりとりによって情報が精緻化されている。また (8) は義母自身は「お茶あげる」とは言っていないが、佐竹が先行する義母の発話をもとに、より周囲に情報を広げるために発話を創作した例である。この (7) (8) の用法は、加藤 (2010) の「先行文脈の関連情報を談話内で追加する用法」に入ると考えられるが、この用法は「相互作用のある談話の中で機能し、一貫性のある談話を作り上げている」(p.115) ものである。

現実会話においては、小説内会話のようにそれらを俯瞰している読者はいない。いるのは、話す話さないに関わらず会話に参加している話者達のみである。このような現実会話においては、小説内会話のように、巨視的伝達を伴う必要はなく、微視的伝達のみとなる。その際に必要なのは話者同士の相互作用であり、話者同士がお互い一つの作品を形作っていくように相互に作用しながら会話を行っていく。それゆえ現実会話においては、「ッテ」文末の引用表現に関しても、小説内会話とは異なり、話者同士の相互作用を必要とする「ッテ」の用法を用いることが多いのではないかと考えられる。

6.1.2 小説内会話における「ッテ」文末引用文の特徴

小説内会話の特徴として、引用動詞が前に来て、「ッテ」を含む引用部分が倒置された結果、「ッテ」文末引用文になっているものが多く見られた。次に例をあげる。

(9) 「だから、はじめに言っといたじゃないの。ペイのことや健康保険のことなんかよく聞い
ときなさいって」 (LBf9_00216 [BCCWJ] 永井路子著『茜さす』)

(10) 「(前文省略)で、おふくろに、さりげなく言うわけ、母さんは悠二を買いかぶりすぎ
るって。」 (LBt9_00242 [BCCWJ] 藤堂志津子著『恋人よ』)

- (11) 「まあ、どうせとっくに駄目になってただけど、ようやく決心ついたみたいでさ。電話の向こうでグチグチ泣いてた。夏休みとれたら田舎に顔出せて」

(LBj9_00031 [BCCWJ] 田村章著『いつかまた逢える』)

- (12) 「トージは知ってたってよ」「知ってた…」 どういう。こと？ 「セーターなんか簡単に編めるもんじゃないんだから、自分のために編んだものじゃないぐらい、もらったときにわかってたって」

(LBg9_00207 [BCCWJ] 青山えりか『好きから始まる冬物語』)

(9)～(12) とも、波線部の引用動詞に付随する引用部が、その後ろに来ていることがわかる。ただ、(9)～(11) のように、その引用部が引用動詞の直後に来るものもあれば、(12) のように、文をまたいで、その後にかかれていた場合もあった。これらの用例は、元は「AはBにQって動詞」という引用の基本型が基となっており、本来は文末にある動詞が引用部Qの前に倒置され、結果的に引用標識「ッテ」が文末にきた型である。加藤(2010)では、このような例を取り上げていなかったが、加藤(2010)で示された分類で考えるとすれば、「引用の基本型を表示する機能を果たすもの」に分類されると思われる。

このような型の引用表現は、現実会話にもあった。次の例は母親が子どもの塾について心配している場面である。

- (13) 島村：だから新しすぎて心配になっちゃってさえ本当の塾なのかしらって。

(K004_008 [CEJC] 1436.16-1440.155)

「え本当の塾なのかしらって」という引用部分は「心配になっちゃって」という引用動詞が率いている引用部であると考えられ、倒置を元に戻すとしたら「だから新しすぎて『え本当の塾なのかしら』って心配になっちゃってさ。」となる。

両会話とも、このような形式の引用表現があったが、今回考察対象とした現実会話では496例中55例で11.1%、小説内会話では519例中301例で58.0%が該当し、両会話における使用傾向に差が見られた。

なぜ、小説内会話では現実会話よりも、このような形式の「ッテ」文末引用文が多いのであろうか。文中のある要素——本研究では引用部だが——を述語の後に置く「後置文」の一つのパターンをメイナード(2005)は「述語先行方略」(p.419)と呼び、このような文を江口(2000)は「認知的に先行する情報を最初に提示する」(p.86)文であると述べた。そして「我々日本人は、ある出来事を観察して、それを言葉として言語化する際、述語動詞を中心に文を組み立てようとするのではないか。」(p.87)と考察したが、本調査における引用文に限っていえば、このような後置文は会話全般ではなく、小説内会話特有の表現であると言える。それゆえ、江口(2000)が述べたような人の認知的な機能による理由ではないと言え、引用表現を伴うこのような後置文は小説内会話ならではの表現的な効果を狙っているものと考えられる。

この効果として考えられるのは、読者に後に続く引用内容部分を期待させる効果である。例えば、上の(9)や(10)も以下のようにすると、『』で括った引用部分が地の文に取り込まれて、

引用内容自体が目立たなくなる。

- (9)' 「だから、はじめに『ペイのことや健康保険のことなんかよく聞いときなさい』って言っといたじゃないの。」
- (10)' 「(前文省略)で、おふくろに、母さんは悠二を買いかぶりすぎているって、さりげなく言うわけ」

しかし (9) や (10) のように、引用部を後ろに置くと、まず引用動詞が先に出されるため、(9) の場合は読者に「はじめに何を言ったんだろう」と考えさせたり、また (10) の場合では「さりげなく、何を言ったんだろう」と期待させたりすることができる。

以上のように小説内会話において多数用いられる、引用部が後置されるタイプの引用文は、相手の登場人物のみを意識しているのではなく読者までも意識して用いられており、「作者の意図」が働いているのではないかと考えることができる。

6.2 小説内会話における「ダッテ？」文末引用文の用法

山崎 (1996) では、「(ん) だって」の用法には、疑問詞と共起して、「相手の話したことを聞き逃した場合や話の内容に即座に反発するような場合」に用いられるものや、「相手の発話（あるいは文章）の中の一部を取り上げてそれが意外であることを表す」用例があることを述べた。以下に例を挙げる。

- (14) 「しかし、気になるな。その井坂って先生が、どうかしたんですか」「それがねー」私が言いかけたとき、「あいつは、死んだ」井坂がぼそりと呟いた。「なんだって？」「兄貴は、死んだんだ」彼は繰り返した。「兄貴…井坂先生は、君の兄さんだったのか」私は意外な返答に驚いていた。
(LBk9_00029 [BCCWJ] 太田忠司著『降魔弓事件』)
- (15) 「ともかく、佐伯も本望でしょう。アルジェリアへ行く前に、一回くらい事件の解決に貢献できて」「何ですって？」夏乃は思わずナブキンをとり落とす。
(LB09_00005 [BCCWJ] 松尾由美著『バルーン・タウンの手品師』)
- (16) 「朝だぞ。また今日も、素晴らしい一日のはじまりだ」「何時だ？」「もうすぐ九時だ」「九時だって？気でも狂ったのか？」(LBf9_00176 [BCCWJ] ディック・ロクティ『笑う犬』)
- (17) 「最近、どこへ行ったと、いっていたね？」「そうね。この前、会った時、秋田から、大阪まで、日本海沿いに、列車に乗ったと、いってたよ。『白鳥』とかいう特急らしい」「『白鳥』だって？」西本の顔が、険しくなった。
(LBq9_00258 [BCCWJ] 西村京太郎『日本海殺人ルート』)
- (18) 「わたしのポッドはあなたの家にあります。わたしはそれを、上部ハッチ内部に秘匿しました」「上部ハッチだって？」トムがたずねた。「うちには二階なんてないぞ！」
(LBf9_00163 [BCCWJ] ロバート・R・マキャモン『ステインガー』)

(14) と (15) は、「なんだって？」と「何ですって？」と、山崎 (1996) でいうところの「相手

の話したことを聞き逃した場合や話の内容に即座に反発するような場合」である。(14)は「警部」「私」「井坂」という登場人物が話している場面であるが、「警部」から尋ねられた「私」が、「それがねー」と話そうと思った矢先、「井坂」が「あいつは死んだ」と告白する。その発話に対して、「私」が「なんだって?」と述べる場面であるが、この「なんだって?」の後に、これを発話した人物がどのような心情であったかは書かれていない。しかし、読者の多くには、この発話自体について、ただの聞き返し以上に、登場人物が発言に驚いている様子が感じられる。実際、その後に「私は意外な返答に驚いていた」と、「なんだって?」以降、「私」が驚いていたことが書かれている。(15)は「ともかく(途中省略)貢献できて」という相手に対して「夏乃」が「何ですって?」と述べる場面であるが、この後に「夏乃は思わずナブキンをとり落とす」という情景が描かれており、この「何ですって?」も登場人物の動揺を表しているセリフであると言える。

(16)～(18)は、山崎(1996)の「相手の発話(あるいは文章)の中の一部を取り上げてそれが意外であることを表す」用例である。(16)では前発話の「九時」を、(17)では「白鳥」を、(18)では「上部ハッチ」という部分を取り上げて繰り返している。(16)では、「九時だって?」というダッテ文末の後に、「気でも狂ったのか?」と話し相手に対する非難や驚いている様子が描かれ、(17)や(18)でもダッテ文末の後の地の文やその後の発話に、ダッテ文末を発話した人物の驚いている気持ちが表れている。

このように、山崎(1996)で述べられた「(ん)ダッテ」の用法が小説会話内の「ダッテ?」文末に多く表れていた。山崎(1996)は「相手の発話(あるいは文章)の中の一部を取り上げてそれが意外であることを表す」用例は、「伝聞・引用と関連性はあるものの固定化した用法」であると述べたが、この用法に限らず、本調査で多く見られた「なんだって?／なんですって?」という用例も同様に、もともとは伝聞・引用であったが、すでに心情を表す表現として固定化されていると考えられる。また、山崎(1996)では、これらの用法におけるレジスターまでは書かれていなかったが、本調査によると、現実会話ではほとんど見当たらず、小説内会話で主に使われている用法であると言える。

それでは、なぜこのような現実には使われないセリフが、小説内会話においては使われるのであろうか。山口(2007)は、「不自然なせりふ」(p.23)として、狂言の出だしや、グルメ漫画の味覚表現を挙げている。以下、山口(2007:23-24)から挙げられている用例を出す。

(19) 小僧：まかり出でたるのは、このあたりに住まい致す者でござる。住まい致す者とは申しましたがモノはモノでも人に非ず、それかし、見てのとおりの…豆腐小僧でござる。

(京極夏彦「狂言豆腐小僧」『京極噺6儀集』)

(20) 山岡：数ある日本酒の中からたった一本を選べと言われたら、迷わず選ぶ、日本酒の最高峰です。

松原：むうう、すごい酒だ!人間の持つ味覚のつば、嗅覚のつば、そのすべてに鮮烈な刺激を与えて、快感の交響曲が口腔から鼻腔にかけて鳴りひびく…

(雁屋哲・花咲アキラ『美味しんぼ』57集)

(19) は狂言の出だし、(20) はグルメ漫画からのセリフであるという。狂言については、山口 (2007) は現実の世界で一人で話しているのはおかしいが、「…慣習化された説明せりふは、劇的緊張には欠けるかもしれないが、観客に対して背景情報を円滑に提示できる」(p.23) としている。グルメ漫画のセリフに関しては、実際の食卓でこのような説明的なセリフを聞くことはないが、「…グルメ漫画の読者は、どのようにおいしいのか説明を求めている」(p.24) とし、この説明的なセリフも自然に読者に享受されるとしている。つまり、狂言でもグルメ漫画でも、フィクションにおける会話には山口 (2007) のいうところの観客や読者も含めた巨視的伝達が存在するため、「不自然なセリフ」が自然に存在するのである。

本調査において調査対象とした小説内会話は、小説内の発話である故、声は伴わない。声を伴い、ちょっと低めの声にしたり、不満であることを顔に表しながら話したりすることができれば、わざわざ「なんだって？」や「なんですって？」といった現実にはないセリフで心情を表す必要もないだろう。しかし小説内会話には「声」は表すことができず、セリフを話す登場人物の表情も確認できない。それゆえ、このような実際には話されていない「なんだって？」や「なんですって？」といったセリフが必要となるのではないだろうか。

石黒 (2007) は「言文一致のパラドクス」として、「書きことばが音声をともなわない以上、書きことばを話しことばに近づけようとする、音声とは別の側面から話しことば的な特徴を付与せざるをえないので、言文一致を進めれば進めるほど、書きことばと現実の話しことばとの食い違いが広がるという現象が起きます。」(p.111) と述べている。読者のことも意識して登場人物の気持ちを表しつつ、登場人物同士の会話も自然なものにしようとする結果、フィクション会話ならではの「不自然なセリフ」が生み出されたのではないかと考えられる。

7. まとめ

本稿では、現実会話と小説内会話における「ッテ」文末引用文の使用傾向を調査した。その結果、両会話ともに使用が多かった「ッテ」文末引用文と、小説内会話でのみ使用が多かった「ダッテ？」文末引用文を取り上げ、これらの考察から現実会話と小説内会話といったレジスターの異なりが、どのように引用文の用法に影響を与えているのかについて考察した。考察の結果、作者の意図の影響がない現実会話では、微視的伝達のみであるため、話者同士の相互作用によって会話は成り立っている。それゆえ、「ッテ」文末引用文も相互作用に依っている用法が見られた。一方、小説内会話では、作者の意図が存在し、登場人物だけではなく読者の存在も意識した巨視的伝達が存在しているため、「ッテ」文末引用文や「ダッテ？」文末引用文にそのような影響が感じられる用法が目立った。本調査によって同じ「会話」ではあるが、レジスターの異なりによって、そのレジスターの特徴を反映した用法が、引用文でも見られることがわかった。

三宅 (2011) はメディアの特性を考慮して言葉の研究を行うことの大切さを説いたが、そう考えるのであれば、小説は先述したとおり、「間接性」を重んじるメディアであることを忘れてはならない。小説とは、必要な表現や言葉のみで成り立っている論文とは異なり、行間や表現の余韻を楽しむメディアである。それを楽しませるための効果として、「ッテ」文末引用文という限

られた文法項目であっても、読者に引用部を期待させるために後置文にしたり、また登場人物の驚嘆した感情を表すために、現実会話には出現しなかった「なんだって?」や「なんですって?」といった表現で表したりしているのではないだろうか。そしてこれらの表現効果は、作者の意図による巨視的伝達に依っている効果であると考えられる。

一方、現実会話は巨視的伝達や作者の意図はなく、話者同士の相互作用によって会話がなりたっている。相互作用、つまり話者同士で一つの会話を作りあっている。そのような背景のため、「ッテ」文末引用文でも、小説内会話とはまた違った相互作用に依る「ッテ」文末引用文が成立している。

金水(2011)は、役割語を学ぶことによって、決して実際には使われないが、しかし日本語母語話者の頭の中にある言語変種の一つを学べるという意義があることを述べた。本稿では両会話で「ッテ」「ダッテ」という同じ形式で使われていても、その使用傾向や用法に差があることを明らかにしたが、今回の調査結果もまた、日本語母語話者の頭の中に知識としてあるであろう「小説内会話」という言語変種の一片を明らかにしたと言える。

本稿で取り上げたように、一見同じ形の文法項目であるが、レジスターが異なれば用法に差が出るものが他にもあるにちがいない。今回は取り上げなかったが、「ンダッテ」も、両会話において異なる用法が見られるかもしれない。今後「ンダッテ」も含め、他にもこのような文法項目があるのか探してみたい。

参考文献

- 大石初太郎(1987)「近代・現代小説会話文の資料性」『国文学 解釈と鑑賞』52(7): 72-79.
 石黒圭(2007)『よくわかる文章表現の技術 V』東京: 明治書院。
 江口巧(2000)「日本語の後置文—情報提示の方略—」『言語文化論究』12: 81-93, 九州大学。
 加藤陽子(2010)『話し言葉における引用表現—引用標識に注目して—』東京: くろしお出版。
 金水敏(2011)「役割語と日本語教育」『日本語教育』150: 34-41。
 金水敏(2014)「フィクションの話し言葉について」石黒圭・橋本行洋(編)『話し言葉と書き言葉の接点』3-11. 東京: ひつじ書房。
 小磯花絵・居關友里子・白田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢(2017)『日本語日常会話コーパス』の構築』『言語処理学会第23回年次大会発表論文集』775-778。
 小西円(2011)「使用傾向を記述する—伝聞の「ソウダ」を例に—」森篤嗣・庵功雄(編)『日本語教育文法のための多様なアプローチ』159-181. 東京: ひつじ書房。
 清水まさ子(2020)「現実会話と小説内会話における引用文の使用傾向—「ッテ+動詞」の形を中心に—」『国文目白』60: 7-15, 日本女子大学。
 泉子・K・メイナード(2005)『日本語教育の現場で使える] 談話表現ハンドブック』東京: くろしお出版。
 高崎みどり(1981)「小説の中の会話文について」『ことば』2: 86-97。
 藤田保幸(2000)『国語引用構文の研究』大阪: 和泉書院。
 三宅和子(2011)「メディア言語研究の意義と日本語教育への応用可能性」『日本語教育』150: 19-33。
 宮寄由美・柏野和佳子・山崎誠(2016)「発話文への発話者情報付与の基本設計:『現代日本語書き言葉均衡コーパス』収録の小説を対象に」『言語資源ワークショップ発表論文集』38-48。
 山口治彦(2007)「役割語の個別性と普遍性—日英の対照を通して—」金水敏編『役割語研究の地平』9-25. 東京: くろしお出版。
 山崎誠(1996)「引用・伝聞の「ッテ」の用法」『国立国語研究所研究報告集』17: 1-22。
 山崎誠・柏野和佳子・宮寄由美(2019)「BCCWJ 小説会話文への話者情報の付与とその活用」『言語資源活用ワークショップ2019 発表論文集』313-320。

関連 Web サイト

国立国語研究所 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』

http://www.ninjal.ac.jp/corpus_center/bccwj/ (2021年3月5日確認)

国立国語研究所 『大規模日常会話コーパスに基づく話し言葉の多角的研究』

<https://pj.ninjal.ac.jp/conversation/> (2021年3月5日確認)

Tendencies in the Use of the *-tte* Sentence-Final Quotation Form in Real-Life Conversations and Conversations in Novels

SHIMIZU Masako

The Japan Foundation Japanese-Language Institute, Urawa /
Project Collaborator, NINJAL

Abstract

In this paper, we examined whether the use of the *-tte* sentence-final quotation form differed by register, focusing on real-life conversations and conversations in novels. Our survey found that the use of the *-tte* sentence-final quotation form was the most common type of quotation form in both types of conversations. Additionally, the sentence-final quotation form in *-datte?* (with a question mark) was common in conversations in novels, but very few instances of *-datte* pronounced in a rising intonation were found in real-life conversations. A closer examination of this difference in the tendencies of quotation use by register showed that the characteristics of the conversations affected the tendency to use the *-tte* sentence-final quotation form. This is because real-life conversations consist of interactions between independent speakers, while conversations in novels reflect the author's intention and need to consider not only the characters but also the readers. We argue that this difference influenced the use of the *-tte* sentence-final quotation form in each register.

Keywords: register, quotations, real-life conversations, conversations in novels, author's intention